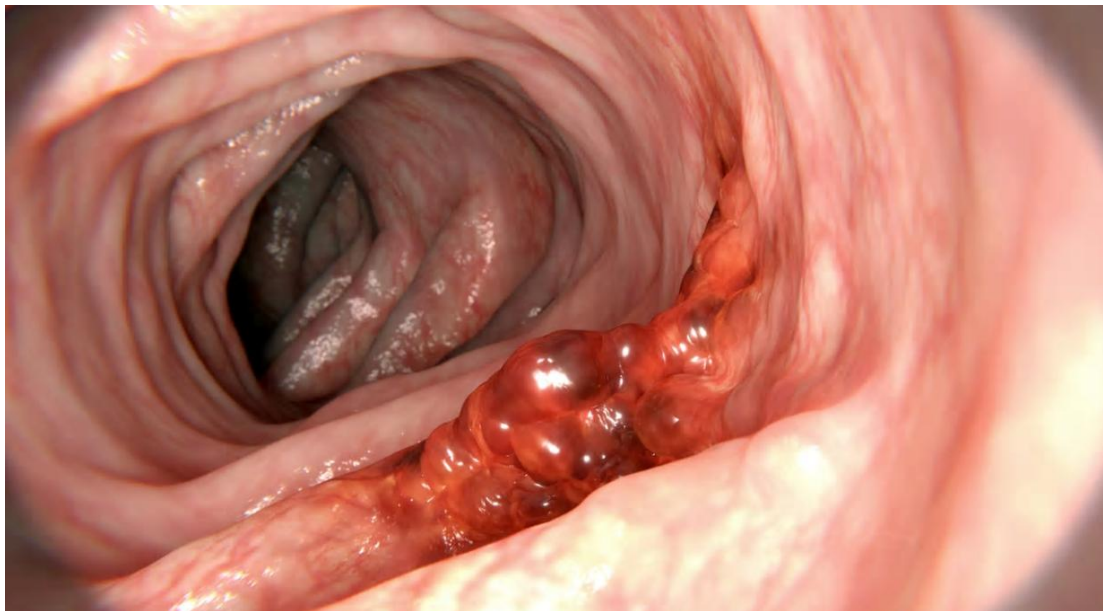


# 大腸内視鏡で非進行腺腫発見は その後の大腸がんリスク低い

大腸内視鏡検査で、がん化の可能性があるポリープ（腺腫）が見つかった人のうち、直径 1cm 未満で進行していないタイプの腺腫であった人の大腸がん発症リスクは、腺腫がなかった人と同程度であったという研究結果が、米国より報告され、JAMA 誌に掲載されました。



大腸内視鏡検査の際、がん化の可能性があるポリープ(腺腫)が見つかり、その時点で切除し、その後経過観察となりますが、15年間の追跡結果から、切除したポリープが「直径が1cm以上」「高度異型腺腫」「乳頭状腺腫」「絨毛腺腫」のいずれかに該当する腺腫であった場合、ポリープがなかった人と比べて、その後の大腸がん発症リスク2.7倍と死亡リスク2.6倍と高いのに対し、「直径1cm未満で進行していないタイプの腺腫」であった場合は、ポリープがなかった人と同等のリスクでありました。

